

## スポーツ科学の発展と多様性への対応

益子 俊志<sup>a</sup>

2024年夏、フランス・パリにおいてオリンピック・パラリンピックが開催されました。日本代表チームが多くのメダルを獲得したことは記憶に新しいと思います。

前回の東京オリンピック・パラリンピックは新型コロナウイルス感染拡大のため、2021年へ1年延期となり、無観客での開催となりました。

スポーツには「する・みる・ささえる」の3つの視点があります。

多くの人がチケットを購入し現地観戦を期待していたことと思いますが、トップアスリートが競技を「する」様子や、大会スタッフや関係者が「ささえる」様子を、現地の競技場やアリーナで直接「みる」ことができなかったことは残念に思います。

しかし、今回のパリオリンピック・パラリンピックは通常通りに現地観戦が行われた大会となりました。オリンピック・パラリンピックは4年ごとに開催され、平和の祭典と言われています。スポーツの持つ力は世界を一つにします。そこには万国共通の感動を生み出す力があります。私も過去に多くの種目や大会を観戦しに国内・国外問わず訪れた経験があります。やはり現地で観た時の興奮や感動は今でも覚えています。応援する選手やチームが勝った時の喜びや嬉しさ、負けた時の悔しさや悲しさは映像で見る時よりも

大きいように感じます。

このように必ず良い結果が生まれるというわけではありません。万全のコンディションで臨んでも失敗することもあります。また、選手たちは最新の知識を駆使していますが、科学の力をもってしても完全ではありません。それでもスポーツ科学を探求することを諦めてはならないのです。何かのきっかけで新たな課題を解明できるはずです。スポーツを多角的に捉え、分野を超えて常識に捉われないで考えることが探求心と好奇心を持続することになると思います。

スポーツは、「みる」というだけでなく「する」ことも「ささえる」ことも大切です。スポーツ科学の研究分野は「する」人を対象とした研究や「ささえる」立場の人や組織あるいは地域の研究、「みる」ことに対する心理面での研究など多岐に渡り行われています。研究の対象や実験方法、考察する学問領域など幅広いことが特徴であり、今後も色々な学問領域が共同研究を行い、いわゆる学際的な研究がさらに増加すると予想されます。

本誌もさまざまな分野・領域の論文が掲載されています。本誌をきっかけとして新たな気づきや、共同研究のきっかけが生まれることを期待しています。

最後に、本誌の発行にご尽力頂きました皆様に感謝申し上げます。

---

<sup>a</sup> スポーツ科学部長・教授